

研究要旨 川崎病のガンマグロブリン治療（IVIg）不応例に対するIVIg再投与とステロイド治療では冠状動脈病変合併の発生頻度に有意差がないが、ステロイド療法では冠状動脈の一過性拡張が見られる。有熱期間ではステロイド療法が短い、等が明らかになった。

分担研究者 加藤裕久
久留米大学 小児科
教授

A. 研究目的

川崎病のIVIg不応例に対し、IVIg追加とステロイド療法の効果をプロスペクティブに比較検討すること。

B. 研究方法

対象は、1994年1月から1998年12月までに、川崎病で当科を受診した262例。その内2回のIVIgに反応しなかった症例をIVIg追加群と、ステロイド療法追加群の2群に分け、以下の方法を用い効果を評価した。

- 1、血液検査、生化学検査
- 2、有熱期間
- 3、断層心エコーでの冠状動脈合併の確認
- 4、選択的冠状動脈造影

C. 研究結果

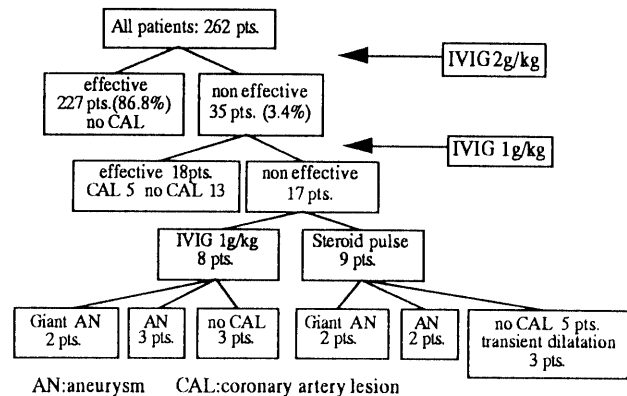
全262例中、IVIg（2g/kg）の初期投与に反応したのが226例（86.2%）、残り36例に対しIVIg（1g/kg）を追加し19例に効果が見られた。2回のガンマグロブリン投与に反応しなかった17例をIVIg追加群とステロイド投与群にわけそれぞれ治療を行った。

1、血液検査、生化学検査
血算(WBC、RBC、Hb、Ht、Plt)、生化学検査(CRP、ALB)では、有意差はなかった。

2、有熱期間
有熱期間は、IVIg使用群で15.4±2.9日、ステロイド使用群で11.2±4.3日と2群間で有意差を認めた(p<0.05)。また、IVIg再投与、ステロイド再投与後の有熱期間においてもIVIg群4.9±3.4日、ステロイド使用群1.4±0.7日と2群間で有意差を認めた(p<0.05)。

3、断層心エコーによる冠状動脈精査
IVIg追加群では、8人中2人に巨大冠状動脈瘤を合併、3人に冠状動脈瘤を合併した。ステロイド追加群では、9人中2人に巨大冠状動脈瘤を、2人に冠状動脈瘤を合併した。各々の冠状動脈病変の合併率は、62.5%、44.4%、2群間で有意差はなかった。ステロイド療法の冠状動脈病変の合併はなかった。5例中、3例に一過性の冠状動脈拡張を認めた。以上より冠動脈合併症の発生率では2群間には有意差はなかった。(図)

4、選択的冠状動脈造影
IVIgの1回目の追加投与に反応しなかった全症例に選択的冠状動脈造影を施行した。



D. 考察

2群間に冠状動脈病変の合併率で有意差が無く、有熱期間でステロイド追加群の方が短い事より、ステロイド治療の再検討が必要と思われた。しかし、ステロイド投与群の一部の症例では冠状動脈の一過性拡張があり、ステロイドが奨励されるには、このメカニズムの解明が必要である。

E. 結論

- 1、IVIg不応例に対して、IVIg追加とステロイドパルス療法でその効果を比較検討した。
- 2、有熱期間では有意差を認めた。
- 3、冠状動脈瘤合併率に有意差は無かった。
- 4、ステロイドパルス療法は治療期間の短縮と医療費の削減の点で今後検討を要すると考えられた。

F. 研究発表

- 1、論文発表
無し
- 2、学会発表
第6回国際川崎病シンポジウム1999年2月11日
Kanoko Hashino, Masahiro Ishii, Motofumi Iemura,
Takahiro Tsutsumi, Teiji Akagi, Hirohisa Kato
Retreatment for Immune Globulin-Resistant Kawasaki
Disease: Comparative Study of Additional Immune
Globulin and Pulse Steroid Therapy.

G. 知的所有権の取得状況

- 1、特許取得
無し
- 2、実用新案登録
無し
- 3、その他
無し

↓ 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

研究要旨 川崎病のガンマグロブリン治療(IVIG)不応例に対する IVIG 再投与とステロイド治療では冠状動脈病変合併の発生頻度に有意差がないが、ステロイド療法では冠状動脈の一過性拡張が見られる。有熱期間ではステロイド療法が短い、等が明らかになった。